

福田恆存のD.H.ロレンス受容

— 「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」を中心に —

An Adaptation of *Lady Chatterley's Lover* for Tsuneari Fukuda's play

古田 高史
FURUTA Takashi

Abstract

This paper explores the way Tsuneari Fukuda transformed *Lady Chatterley's Lover* into his adaptation of the original novel.

In 1950, Sei (Hitoshi) Ito's translation of this novel was published. Following the publication, Ito and the publisher were prosecuted for interfering with the Article 175 of the Japanese Criminal Code, which prohibits publication of works deemed obscene. Many writers, critics and researchers of the English literature made a comment on the trial. Thus, in the early 1950s, *Lady Chatterley's Lover* was among the most notable English novels in Japan.

Tsuneari Fukuda appeared before the court as a special counsel. In 1952, his speech to the court was published in *Bungaku-kai*, a major Japanese literary magazine. In addition, he adapted *Lady Chatterley's Lover* into a play that was broadcasted on the radio in that year. His play was finally published in 2009 as the second volume of *The Complete Plays of Tsuneari Fukuda*.

At first, I analyzed how Fukuda adapted *Lady Chatterley's Lover* into his play. In Lawrence's novel, Clifford Chatterley, who had been half-paralyzed and rendered impotent during the war, urged his wife, Constance, to have a child by another man to carry on his genealogy. His words annoyed Constance, and they quarreled while remaining childless. In his play, Fukuda focused on the dialog between the husband and wife, emphasizing the wife's heartfelt words, and her distrust of her husband. Thus, the wife's words became central in his play. In addition, his speech during the Japanese trial of *Lady Chatterley's Lover* emphasized the wife's distrust of her husband. Thus, Fukuda's emphasis on Constance Chatterley's distrust of her husband had been the central feature of his testimony during the obscenity trial. That interpretation reappeared in Fukuda's adaptation of *Lady Chatterley's Lover*,

and it also was his central theme in adapting an earlier novel as a play.

Then, I showed how Fukuda's views on Constance Chatterley's distrust of her husband influenced his writings in the early 1950s by focusing on his adaptation of Shohei Ooka's novel *Musashino Fujin* (*Madame Musashino*).

I はじめに

1952年1月、福田恆存は、チャタレイ裁判の最終弁論を「結婚の永遠性」として、『文学界』に掲載した(福田 1987c)。また、同年5月には、D・H・ロレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』*Lady Chatterley's Lover*を戯曲に脚色した「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」を、ラジオ九州により放送した(福田 2009e)。この放送劇は、これまで未刊行の戯曲であったが、2009年、『福田恆存戯曲全集 第2巻』として出版された。この戯曲は、下半身不随の夫クリフォードが、妻コンスタンスに対して、ほかの男性の子供を産んでほしいと話す会話部分を中心とした前半部分、森番メラーズとコンスタンスが出会い、コンスタンスがクリフォードと離婚しようとする後半部分から構成されている。また、チャタレイ裁判で起訴の理由として挙げられた12か所の性描写の部分(倉持 2007: 38, 39)には触れられていない。

一方で、チャタレイ裁判の特別弁護人となった、1951年5月以降の福田の主な仕事を挙げると、大岡昇平の小説『武蔵野夫人』の戯曲への脚色(福田 2010)、「幽霊やしき」(福田 2009c)、「龍を撫でた男」(福田 2009d)、「現代の英雄」(福田 2009f)などの戯曲がある。さらに、1952年に発表した二つの文芸評論、「告白といふこと」(福田 1987d)とその続編の「自己劇化と告白」(福田 1987e)とは、「今から思ふと文芸批評家引退挨拶のやうなもの」(福田 1987f: 359)と、福田自身が、後年、振り返っている。この言葉に示される通り、福田は、文芸批評を活動の重点から外していった。そして、この時期において、福田は、戯曲の創作を本格化していったのである。

福田のD・H・ロレンス受容に言及するこれまでの研究論文は、「アポカリプス論」と福田の初期批評との関連を分析するものがほとんどである(高柴 1987、浜崎 2007、小澤 2008、川久保 2008)。一方で、磯田は、福田の卒業論文「Moral Problems in D.H. Lawrence —D・H・ロレンスに於ける倫理の問題」を紹介しながら、この卒業論文を、戯曲「キティ台風」、評論『人間・この劇的なもの』へとつながる「萌芽」としている(磯田 1967: 3-5)。つまり、D・H・ロレンスから福田が受けた影響を、後年に展開される演劇などの活動と結びつける視点を示している。ここで、D・H・ロレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』を巡る裁判に福田が特別弁護人として関わっていたのと同時期に、戯曲の創作を本格化させていることは、福田のD・H・ロレンス受容と福田による戯曲の創作との関わりを示しているように思われる。

しかしながら、上述したようなチャタレイ裁判の間とその前後の時期における福田の活動に焦点を当てる研究は、これまであまりなされてこなかった。そこで、本稿では、この時期に発表さ

れた「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」を分析していく。D・H・ロレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』を題材とし、戯曲という形をとったこの作品を通して、チャタレイ裁判の間とその前後の時期における福田のD・H・ロレンス受容の一つの側面を提示したい。

II 「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」の特徴

この放送劇では、会話部分の間に、クリフォードの妻である、コンスタンスの言葉により、彼女自身の気持ちが回想されるといふ、以下のような構成が大部分を占めている。

クリフォード 「いや、私はただ確かめたかつただけだ。夫婦の愛情は肉体の交りだけぢやない、私だつてさう思ふさ、ただ、あなたもさう思つてゐるかどうか確かめたかつただけのことさ。いつまでもさう思つてゐられるかどうかをね。」

[中略]¹

クリフォード 「いや、私は信じてゐるよ、夫婦の愛つていふものを。」

コンスタンス うそだ、あの人は信じてゐはしなかつた。それが私にはわからなかつたのだ。が、私にはわからないものを、あのひとはそのときはつきり見てとつてゐた。その後、おなじやうな言葉のやりとりが、茶の間に、あるいは庭を散歩しながら、私たちの間に幾度となく繰り返されてきたものだ。そして、さういふ会話が何度も繰り返されていくうち、言葉の表面上の意味は剥げ落ち、その奥にあるクリフォードの心だけが生々しく露出して、私の眼に映るやうになつた。あの人の言葉がなにを意味しようとも。私はそこにあの人の声だけを聴きとつた、あの意地のわるい声にこもる冷たい心だけを。

クリフォード 「あなたはいまでも私を愛することができるかね、昔と同じやうに……？」

コンスタンス 「昔のやうに？」

コンスタンス なんといふ間のぬけた問ひかへしかただ、クリフォードは私になにも訊いてはゐなかつたのだ、私の答へなど期待してはゐなかつたのだ。クリフォードはただからかつてみただけではなかつたか。いや、命令してゐたのだ、強制してゐただけだ、「昔のやうに私を愛せ」と。しかも、なほ悪いことに、そんなことが

1 引用文中の、[]は執筆者による注記、()は原文による。また、下線は執筆者による。以下、同じ。

おたがひにできないと承知しながら……。が、本当にできないことだらうか。肉体の交わりを絶つた夫婦がいつまでも愛しあふといふことは？出来ない筈はない、あのときなら出来た。それを不可能にしたのは、私ではなくて、あの人だ。あの人が不可能と決めてしまつたから、不可能になつたのではないか。クリフォードは私を信じなかつた。あの人はさういふひとだ、信じてゐないのに信じてゐるなどといふ……。

クリフォード 「いゝや、私は信じてゐるよ、夫婦の愛つていふものを……。ただ、私はあなたに私の子供をあげられないのが残念なのだ」

[中略]

クリフォード 「私の云ふ意味が、わからないのかね？あなたはなにかに捉はれてゐる。[中略]もし、あなたが、誰か外の男の子供を産んでくれたら……。たとへさういふことがあつたとしても、私たちの愛情には、なんのひびもはひりはしない、だらう？父親が誰かなどといふことは、いつてしまへば、まあどうでもいいことなのさ。子供は私たちの子供であり、チャタレイ家の子供であることに変りはない。ね、さうだらう。」(福田 2009e : 300, 301)

上の引用の、「」部分が会話の部分であり、「」のない下線部分がコンスタンスによる回想の言葉となっている。この会話で、クリフォードは、「夫婦の愛情は肉体の交わりだけぢやない」と述べている。その上で、クリフォードは、コンスタンスとの間の「夫婦の愛」は、彼女がほかの男性の子供を産んだとしても、変わらないのではないかとコンスタンスに対して問いかけている。そして、回想部分では、クリフォードが、彼女の愛を信じていないというコンスタンスによる悲嘆の言葉が繰り返されている。一方で、原作の対応する箇所では、コンスタンスによる発言は存在しない。原作からの引用を見てみよう。

「そこで子供がほしいのだよ。僕はただ鎖の環の一つなのだから」と彼が言つた。彼女は鎖といふものなどはどうでもいいのに、と思つた。だが彼女はそれを言ひださなかつた。彼女は、子供をほしがる彼の気持の、妙な没個人的な處を気にかけてゐた。²(D・H・ロレンス、伊藤整訳 1950年上巻：73)

「[前略]子供のないことが支障を生むならば、何とかして子供を持つのだね。だがそれは、永続する調和のあるものを作る完全な生活を得るためにすべきことだと思

2 (原文) "That's why having a son helps. One is only a link in a chain," he said. Connie was not keen on chains, but she said nothing. She was thinking of the curious impersonality of his desire of son. (D. H. Lawrence 2006: 43)

ふ。そして僕とあなたとの間ではそれが出来ると思ふ……そうは思はないかね？[中略] コニイは彼の言葉に少し圧倒され気味であつた。彼の言ふことが理論的に正しいことは彼女に解つてみた。だが彼女が彼と一緒に暮した継続的な生活のことを考へると……彼女は何んとも躊躇するのだつた。この後の一生を彼女は彼の生活の中に織り込まねばならないのだらうか？³(D・H・ロレンス、伊藤整訳 1950年 上巻：76)

これら二つの引用では、子供を巡る、クリフォードによる発言に対して、コンスタンスが戸惑っている様子が示されている。福田は、この部分に読み取ることのできる、コンスタンスの嘆きを、彼女自身の言葉を通じて、語らせているのである。福田の放送劇では、会話の間に、このようなコンスタンスの回想の言葉が繰り返されている。つまり、福田は、彼女のクリフォード観を、原作に比べてより強調しているのである。

そこで、福田が、この放送劇において、なぜ、コンスタンスのクリフォード観をはっきりと描いたのか、その背景を考察したい。

III 福田のクリフォード観

福田は、前述した「結婚の永遠性」において、小説『チャタレイ夫人の恋人』の中で、クリフォードが、どのように描かれているのか、繰り返し説明している。以下の引用には、福田のクリフォード観が、端的に表れている。

クリフォードは、他人、より多くは人間全体に対して信頼感を喪失してゐる現代人として念入りに描かれてゐるのです。「チャタレイ夫人の恋人」に「ただ人間接触の否定といふことがあるだけであつた」（上巻二十九頁）と書いてありますが、この信頼感の喪失から、人間は自分だけしか頼るものがなくなり、孤独に陥り、他人からの脅威を感じ、そしてこの恐怖感から脱け出すためには、つねに自分を他人より優越する地位に置いて置かねば不安でなくなります。(福田 1987c：58、59)

3 (原文)“……If lack of a child is going to disintegrate you, then have a child if you possibly can. But you only do these things so that you may have an integrated life, that makes a long harmonious thing. And you and I can do that together- don't you think?- ……”

Connie was a little overwhelmed with his words. She knew he was right, theoretically. But when she actually touched her steadily-lived life with him, she -hesitated. Was it actually her destiny to go on life with him, she hesitated. Was it actually her destiny to go on weaving herself into his life all the rest of her life? (D. H. Lawrence 2006: 45)

福田が引用している、原作の「ただ人間接触の否定といふことがあるだけであつた」という言葉があらわれる場面では、下半身不随となったクリフォードの抱く、他人に対する恐怖感が、炭坑で働く人々へのクリフォードの接し方を通して、描かれている。

坑夫といふのはある意味では彼自身の部下のやうなものであつた。だが彼は、彼等を人間としてよりも物として、生命あるものとしてよりも、炭坑の一部分として、彼と同様な人間としてよりも、粗雑な自然の現象として見てゐたのである。ある意味では彼[クリフォード]は彼等を怖れてゐた。今足の自由を失つた自分を彼等に見られるといふことを我慢することができなかつた。⁴

(D・H・ロレンス、伊藤整訳 1950年上巻：28)

クリフォードは、「坑夫」を「彼と同様な人間として」見ていない。つまり、彼にとって、「坑夫」とは、彼の支配を受ける対象なのである。彼は、下半身不随となった自分の姿を、「坑夫」が見ることを嫌悪している。福田は、このようなクリフォードの態度に、他人に対する「恐怖感」と、他人を支配しようとする権力欲を読み取っている。さらに、福田は、クリフォードの抱く劣等感を、以下のように分析している。

これ[防衛的攻勢]は劣等感を前提とし、それから逃げたいために先手を打つて攻撃するといふ心理状態で、このさい優越意志の根底にはつねに劣等感がまはりついてをります。[中略]ロレンスにいはせれば、現代人は誰でもこれ[防衛的攻勢]をもつてゐる。クリフォードがその典型です。[中略]「チャタレイ夫人の恋人」にもかう書いてあります—[中略]コンスタンスのクリフォードにたいする批評として「コニイは又しても彼女の同時代の男性の片意地とけちな根性とを感じた。みんなきちんと、びくびくしながら暮らしてゐるのだつた。」[中略]なほ「きちんと」といふのは、隙がなく、自分を優越せる立場に置いておくといふことであり、「びくびくしながら」といふのは、弱味を、劣等感を感じてゐるといふ意味だと諒解されます。

(福田 1987c : 59)

この引用で注目したいのは、福田が、原作に描かれている「コンスタンスのクリフォードにたいする批評」に言及しながら、クリフォードの「防衛的攻勢」という「心理状態」を説明してい

4 (原文) The miners were, in a sense, his own men: but he saw them as objects rather than men, parts of the pit rather than as parts of life, and crude raw phenomena rather than human beings along with him. He was in some way afraid of them, he could not bear to have them look at him now he was lame. (D. H. Lawrence 2006: 15-16)

る点である。ここでの「防衛的攻勢」とは、クリフォードが他人に対して抱く、前述したような恐怖感と権力欲のことである。つまり、福田は、ここでも、クリフォードを、他人に対する信頼をもつことのできない人物として強調している。そして、上の文章で引用されている、原作にある言葉は、クリフォードが、メラーズを「下層階級」として軽蔑していることに対する、コンスタンスの反応である。この言葉からは、コンスタンスが、クリフォードに対して嫌悪感を抱いていることが確認できる。さらに、福田は、次のように述べている。

ロレンスが、或はコニイが、クリフォードを嫌ったのは、不能そのものではなく、不能から生じる冷酷さであり、優越意志であり、片意地であります。ロレンスはかう書いてをります「それは（夫婦の暖い接触を不可能ならしめたものは）完全な不能からくる残酷さであつた。」そして、それらのものはたとへ不能者であつても、避けようと思へば避けられるのであつて、「チャタレイ夫人の恋人」のどこをのぞいても、不能即冷酷と書いてある箇所は一つもありません。（福田 1987c : 59、60）

コンスタンスは、今まで示してきたような、他人に対するクリフォードの冷酷さを受け入れることができなかつた。そして、作者であるD・H・ロレンスも、この冷酷さを批判しているのだという、福田自身のクリフォードに対する解釈が、上の引用では示されている。

先述した放送劇において、コンスタンスの回想の中で悲嘆されていたのは、クリフォードの冷酷さであった。つまり、放送劇に見られるコンスタンスの回想部分の内容は、福田のクリフォード観と同様なものといえる。この点で、放送劇のコンスタンスによる回想は、福田自身の解釈を示すものであったと言える。

今まで見てきた、福田による原作からの引用に確認できるように、原作にも、クリフォードの冷酷さを嫌悪するコンスタンスの態度は描かれている。福田は、放送劇としての脚色の中で、このコンスタンスの態度を、彼女の回想という形をとることで、より強調していたのではないか。

それでは、福田は、なぜ、D・H・ロレンス=コンスタンスのクリフォード批判に共感したのだろうか。福田の言葉を見てみよう。⁵

ロレンスは、クリフォードのことをさういふ自意識の悪循環に陥つてゐる作家だと申しましたが、（二九ペ下段・三三ペ下段・八四ペ下段）もちろん、既に申しましたようにロレンスの中にもクリフォードは棲んでをります。ロレンスは自分も又、二十世紀の知識階級として、その悪循環から脱けださうとした作家です。同様に、

5 「結婚の永遠性」という論文は、「雑誌にのせるため、数十枚削除した」（福田 1952 : 153）ものであり、ここで引用した言葉も削除されている。そのため、ここでは、「弁論要旨」から引用している。

伊藤さんにしても、いや、われわれ現代の文学者はすべてその悪循環の苦痛を味わつてをります。(福田 1951b : 281、282)

ここでの「自意識の悪循環」とは、クリフォードが他人を怖れることから、ひたすら他人を支配しようと苛立っていく様子を指している。そして、福田は、「われわれ現代の文学者はすべてその悪循環の苦痛を味わつて」いると述べている。ここで、福田は、クリフォードに読み取れる「自意識の悪循環」を、「現代の文学者」の抱える問題点として取り上げている。つまり、今まで示してきた「自意識の悪循環」とは、福田自身にとっても、当面している問題であったと言える。それゆえ、D・H・ロレンス＝コンスタンスのクリフォード批判に共感を示しているのである。

次に、ここで論じた「自意識の悪循環」という問題は、福田自身の中で、どのように発想され、考えられてきたのか、福田の書いた文章を通して考察していこう。

IV 福田による批評とD・H・ロレンス

まず、福田において、「自意識の悪循環」という問題が、どのような形で、発想されたのかを確認しておこう。

福田は、1936年、D・H・ロレンスをテーマに卒業論文を執筆した(磯田 1967 : 3)。その同年に発表した、「リアリズムと批評の問題—文芸時評—」を見てみよう。この論文では、同時代の文壇で流行していた「リアリズム」が批判の対象となっている。

とにかく書いて見る。文句を云つても駄目だ。これは厳然たる事実だ、事実である以上、これに眼をそむけなければ、きつと何ものかを得るだらう。君達がそれを得なければわるいのは君達で、唯われわれはそこに何かあると信じ、従つてそれを書く義務があるのだ、一と、そこでリアリスト達は遅しい経営を続ける。[中略]かくして永年たつ中には読者も作者もリアリズムこそ小説の本道だと考へる習慣が身に浸みて了つた。かうなれば小説の重点は、ものを視察する眼と、それを描写する腕にかゝつてくる。批評の基準は現実のもつ生々しさといふ実感にあるのだ。そこで、作者の経験の広さとか、その苦悩に彩られた人心の機微といふ様なものが珍重されだしてくるのである。年の功がものを云ふ。で若い人達も老人に負けず劣らず、経験の豊富をひけらかし、性格の複雑さに於いて、ひとの優位に立たうと卑しい努力をする。この洞察力を見てくれ、この認識の鋭さはどうだ—私は近頃どの作品を読んでも、かうした醜い囁きに悩まされる。1つ1つ読み進む中に、此れ等の囁きは次第に高まり、漸く喧々たる絶叫となつてその彼方に文壇といふあぶれ者の落ち集ふ伏魔殿が見え出して来たりして、果ては、創作の動機などといふ高邁な精神も結局はこんな低俗な所にその源を発してゐるのではないかと怪まれさへするので

ある。(福田 1936 : 123、124)

福田の批判する「リアリズム」では、「作者の経験の広さとか、その苦悩に彩られた人心の機微」という「作者」自身の「現実のもつ生々しさ」が重視される。その結果、「この洞察力を見てくれ、この認識の鋭さはどうだ」という作家の自己主張が繰り返される。福田は、こうした作家の自己主張を、「卑しい努力」、「醜い囁き」、「低俗」なものと述べている。

また、1937年に発表された、「横光利一と『作家の秘密』」も、「リアリズムと批評の問題」同様、作家の自己主張に言及するものである。福田は、横光の作品を、以下のように批判する。

彼等[横光の作品の主人公たち]は、大義名分の下に現実社会に於ける金銭、地位、権力、成功に対する激しい野心と、そして、女性に向かつては、高潔なる恋愛の陰に肉体に対する卑しい欲情を隠し有つてゐるのだ。(福田 1937 : 22)

福田は、以上のように、横光の作品の主人公たちに、「激しい野心」、「卑しい欲情」を読み取っている。そして、作者である横光に対して、「横光利一の自己優越感は、現実を前にして漸く自己弱小観、自己卑屈観と手を握ったといふこと、これである。われわれは「紋章」「家族会議」に一種の自慰的傾向を見る」と批判している(福田 1937 : 17、18)。つまり、福田による、この横光論も、作家の自己主張の卑しさを、否定的に論じたものといえる。

以上に挙げた、作家の自己主張の卑しさに言及した、「リアリズムと批評の問題」、「横光利一と『作家の秘密』」の中には、いずれも、D・H・ロレンスの「アポカリプス論」への言及がある。「リアリズムと批評の問題」では、「力のない精神主義者がバビロンの打倒を願ふ卑しい喜びの歌が黙示録だ。と云つたのはローレンス」(福田 1936 : 124)とあり、「力のない精神主義者」が、権力を求めることは、自分自身の存在から目を背け、空想の上で権力者になることに満足するという「アポカリプス論」の内容に、福田が注目していることが確認できる。さらに、「横光利一と『作家の秘密』」でも、「強きもの、権力あるものを倒せ、而して、力無きものに栄光あらしめよ、と弱者の宗教は教えた。—D・H・ロオレンス」(福田 1937 : 6)、「自己正当感、自惚、自己重視、而して秘かな嫉妬がその下に横たはつてゐる—D・H・ロオレンス」(福田 1937 : 11)というD・H・ロレンスの言葉が記されている。そのため、福田が、前述した2つの文章において、作家の自己主張の卑しさを批判しているのは、「アポカリプス論」から発想を得たためであることが確認できる。福田は、D・H・ロレンスによる「黙示録」の分析に照らして、同時代の文壇における作家の自己主張の卑しさを批判したのである。その後、1942年、福田は「ロレンス『アポカリプス論』覚書」を発表している。この文章で、福田は、「アポカリプス論」の次の一節を引用している。

ただ己れの個人的自我にのみ意を払い、その集団的自我を蔑視するところの個人のための理想をもつことは、永きにわたればかならず破綻を惹起する。また教門政治

の現実性を否定する個性信仰を固執するならば、ついには世界は今以上の無政府状態に導かれるであろう。民主主義国の人間は結合と抵抗とに拠って、いかえれば《愛情》の結合力と個人的《自由》の抵抗力によつて生きているのである。愛情にまつたく身を委ねざるならば、底の底まで絞りとられ、ついには個人の死を招来する。本来、個人はなんとしても己れの立場を堅持していかねばならないものだからだ。さもなければ《自由》も、独自性も失ってしまうであろう。かくして、吾々の時代はみずからなした証明に驚愕呆然たるものがあつたが、とにかく吾々は知つたのだ、個人はついに愛することができぬという事実を。個人は愛することができない。これを現代の公理とするがいい。近代の男女は個人として以外に自分自身のことを考えないのだ。ゆえに、彼等のうちにある個性は、ついにおなじく自分たちのうちの愛し手を殺さねばやまぬ宿命にある。⁶(福田 1942 : 105)

福田は、この部分を引用した上で、「まさに二十世紀ヨーロッパの悲歌である。僕達は「チャタレイ夫人の恋人」がその終曲に奏でた挽歌のメロディをより明瞭な形に於いてこの「アポカリプス論」に聴いたのであつた。」と述べている(福田 1942 : 105)。ここで、福田のいう「二十世紀ヨーロッパの悲歌」とは、それぞれの「個性」の追求が、各自の欲望の表出と、その結果、対立が生じるといふ繰り返しに終始してしまうという「悪循環」を意味している。福田によれば、「アポカリプス論」とは、こうした「悲歌」を「明瞭な形」で表現した文章なのである。以上のように、福田は、「アポカリプス論」から、「個人はついに愛することができぬ」という認識を得た。ここで論じた、福田における「アポカリプス論」の読み方は、1947年に発表された「近代の克服」において、以下のように深められている。⁷

近代は個人それ自体のうちにそれを求め、そして失敗した。自律性はうちに求めるべきではない。個人の外部に一宇宙の有機性そのもののうちに求められねばならぬ。ぼくたちは有機体としての宇宙の自律性に参与することによって、みずか

6 (原文) To have an ideal for the individual which regards only his individual self and ignores his collective self is in the long run fatal. To have a creed of individuality which denies the reality of the hierarchy makes at last for mere anarchy. Democratic man lives by cohesion and resistance, the cohesive force of "love" and the resistance force of the individual "freedom". To yield entirely to love would be to be absorbed, which is the death of the individual: for the individual must hold his own, or he ceases to be "free" and individual. So that we see, what our age have proved to its astonishment and dismay, that the individual cannot love. The individual cannot love: let that be axiom. And the modern man or woman cannot conceive of himself, herself, save as an individual. And the individual in man or woman is bound to kill, at last, the lover in himself or herself. (D. H. Lawrence 2002 : 147)

7 この点について、「その[D・H・ロレンスおよび彼の著書『アポカリプス論』]影響の内容については戦前・戦中と戦後とで、変化が見られる」との指摘がある。(川久保 2008 : 27)

らの自律性を獲得し他我を愛することができるであろう。愛は迂路をとらねばならぬ。それは直接に相手に向けられてはならぬ。キリスト教もそれを自覚していた。が、ロレンスはその迂路をば、宇宙の根源を通じることによって発見した。(福田 1987a : 37)

それぞれの「個人」は、「己の立場」を守ろうとするため、「他我」と対立する。「集団」内の「個人」において、こうした対立は、「己の立場」を貫く支配か、「他我」により支配されるかに、一元的に解消される。このような、水平的・相対的な「己の立場」同士の対立は、垂直的・絶対的な「迂路」により、均衡を保つことができる。D・H・ロレンスは、「宇宙の根源」を、「迂路」とすることで、均衡を保とうとしている。そのため、「アポカリプス論」の終わりでは、「吾々の欲することは、虚偽の非有機的な結合を、殊に金銭と相つらなる結合を打毀し、コスモス、日輪、大地との結合、人類、国民、家族との生きた有機的な結合をふたたびこの世に打樹てることにある」⁸という言葉に表れるような、「個人の外部」にある「宇宙の根源」との結びつきが強調されるのである(D・H・ロレンス 福田訳2004 : 215)。

以上のように、福田は、欲望を表出し、その結果、対立を生んでしまう「個人」の自律性を持つことのできない弱さを、「個人の外部」との結びつきにより克服しようとする、D・H・ロレンスの発想に共感を示している。さらに、同年、福田は、「文学の効用」という文章において、次のように記している。

もしひとつの時代がみづからの不安定性を真実にまで定着しえたとするならば、それはその時代がそれ自身の様式をもちえたことを意味するのにはほかならない。ある時代がその様式をもちえたとき、その服装も住居も交通機関も、すべてはおのが時代の様式を呈示する。いや、哲学にも倫理にも、政治にもこの兆候があきらかに看取される。そして、芸術こそは、哲学から、倫理から、政治から、その他の実用品から、それら自身の肉体を脱落せしめ、そのかほりにみづからの肉体を獲得したもののことである—ほかならぬ様式そのものの確立のために。それみづからの様式をもたぬ時代も民族もないばかりではなく、その様式を獲得せずして、ひとつの時代もひとつの民族も、おのれを歴史のうちに位置づけることはできないのだ。すでにあきらかなやうに、時代や民族の精神的真実はまさに様式の美によつて証されるのである。(福田 1987b : 264)

8 (原文) What we want is to destroy our false inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. (D.H.Lawrence 1995 : 149)

上の引用では、ある「時代や民族」は、それ自身が過ぎ去り、または、滅びてしまえば、その存在を示すことのできない「不安定」なものと考えられている。ある「時代や民族」は、「様式」を得ることで、「おのれを歴史のうちに位置づける」という。先述した「近代の克服」では、自律できない(=「不安定」な)「個人」が、「個人の外部」と結びつくことで、その弱さを克服するという発想が記されていた。福田は、この発想を、ある「時代や民族」の「不安定性」に敷衍して、「様式そのものの確立」を主張しているのである。ここにおいて、福田は、先述した自己主張の卑しさに対する批判から、それを乗り越えるための「様式そのものの確立」へと視点を展開している。

そして、福田は、1948年の戯曲「最後の切札」(福田 2009a)の発表以降、1950年の「キティ台風」(福田 2009b)、本稿の冒頭で言及した「幽霊やしき」、「龍を撫でた男」、「現代の英雄」など、戯曲を次々と発表していくことになる。これらの戯曲について、後年、福田は、次のように述べている。

私の文学論、ことに戯曲論において、下敷の必要はかなり本質的なものである。[中略]貧弱な想像力が現実の輪郭を無視しがちなのを抑制するために、何か型がほしいのである。その場合、現実のモデルなどといふものは大して頼りにならない。古典の方が遥かに頼もしい。(福田 1958:284)

福田は、上述した戯曲について、その「下敷」を明かしている。例えば、「キティ台風」は、A・チャーホフの『櫻の園』を、「龍を撫でた男」では、T・S・エリオットの『カクテル・パーティ』を、また、「現代の英雄」は、W・シェイクスピアの『マクベス』を、それぞれ取り入れた戯曲である。

上の引用から確認できる通り、福田は、こうした一連の戯曲の創作にあたり、「貧弱な想像力が現実の輪郭を無視しがちなのを抑制するために」、「型」を求めたのである。「貧弱な想像力が現実の輪郭を無視しがち」という福田の言葉の背後には、D・H・ロレンスの「アポカリプス論」から読み取り、福田自身の批評の中で、作家の自己主張の卑しさに対する批判として表れていた、「個人」の弱さに対する認識がある。

先に論じた通り、福田は、チャタレイ裁判の最終弁論において、クリフォードが他人を怖れることから、ひたすら他人を支配しようと苛立っていく姿勢を、「われわれ現代の文学者はすべてその悪循環の苦痛を味わつて」と批判的に捉えていた。こうした福田のクリフォード批判は、彼の脚色した放送劇において、コンスタンスの回想を通して語られている。この放送劇でのコンスタンスのクリフォード批判の強調の背後には、福田が、クリフォードに読み取った「自意識の悪循環」という問題に対する、福田自身により積み重ねられてきた、ここまで示してきた思索があるのである。それでは、上述のような、福田の問題意識は、どのような形で、彼の活動の中に展開されていったのだろうか。以下では、その一例として、福田による『戯曲 武蔵野夫人』における脚色のありようを示したい。

V 『戯曲 武蔵野夫人』

1951年6月、雲の会編集『演劇』の創刊号には、福田による脚色『戯曲 武蔵野夫人』が掲載されている。先に述べた通り、この戯曲は、大岡昇平の小説『武蔵野夫人』を、戯曲へと脚色したものである。⁹具体的に、福田の脚色した戯曲を見てみよう。秋山夫妻の家に同居することになった勉は、秋山の妻道子に恋愛感情を抱くようになった。ある日、勉と道子は、「狭山丘陵」を見に出かけた。そこで、嵐のため、二人は外泊することになった。その日の夜、勉と道子は以下のような会話を交わしていた。

勉 神を信じるんですか。

道子 わからない。いゝえ、わからないから信じるのよ

勉 自分を苦しめるために？

道子 (首をふる) 勉さんは、人間の自由を信じてゐるの？

勉 もちろん信じてゐます。

道子 ぢや、あたしが誓ひを信じるのとおんなじね。(福田 2010 : 250)

上の会話で、道子が述べる「誓ひ」とは、「これはあたしのお願ひなのよ。あたしたちが一生愛しあつていくためには、勉さんにうちを出してもらふよりほかにしかたがないの……。」(福田 2010 : 248)、「もしあたしたちの愛が永遠に変らないことさへ誓へれば……、[中略]世間の道徳のほうで改まつてくるのよ。そしたらあたしたち、自分を傷つけないでいつしよになれる……、きつとさういふときがくるわ」(福田 2010 : 249)という言葉に表れている。道子は、勉を愛しているが、「世間の道徳」を捨てることができず、勉に道子の家を出て行ってほしいと言いだす。そして、「世間の道徳」を破ることなく、二人が「いつしよになれる」まで待とうとしている。そこで、勉に「誓ひ」を求めるのである。一方で、勉は、道子に対する愛情を貫くため、「世間の道徳」は顧みず、道子と一緒にしようとする。そのため、この引用で、勉は、「自由」を信じていると述べるのだ。以上のように、ここでは、「世間の道徳」を守る道子の「誓ひ」と、「世間の道徳」を顧みない勉の「自由」は対置されている。上に引用した、勉と道子の会話は、この戯曲の後半において、「勉の回想」として繰り返されている(福田 2010 : 274、275)。その上で、この戯曲は、次のような言葉で終わっている。

忠雄 (静かに) いまこそきみは自由だ。道子を殺したのはきみだ。

勉 (しばらく黙つてゐるが、突然からからと笑ひ) 道子さんの死を背負つたおれの自由がどんなものか、きさま、知つてるのか。きさまは運のいゝやつだ……、

9 みなもとごろうは、福田の『戯曲 武蔵野夫人』について、「小説批評の舞台化あるいは小説に内在するものの舞台化ともいうべきのを目指していた」と述べている(みなもと 1977 : 163、164)。

おれにはきさまのことなんて、かまつてゐるひまはないからな。(じつと相手を見つめ、やがて) さよなら……。 (福田 2010 : 275、276)

以上のように、勉自身により、道子の死へつながった勉の「自由」 (=道子への愛) が強調され、この戯曲は幕を閉じる。こうした、「誓ひ」と「自由」の対立は、福田の脚色した「戯曲 武蔵野夫人」の基調となっている。原作の作者である、大岡は、この点について、以下のように、評している。

「なんだ、僕の書いてゐたのは、かういふ奴等だつたのか」と僕は思ひました。愉快な発見でした。しかし僕の一番感激してゐるのは、若い勉を主人公らしい主人公にして下さつたことです。[中略]殊に驚くべきことは、あなたが勉に付与された自由の観念です。これは道子における「神」と共に、拙作では潜在的なものとして暗示する勇氣しかなかつたものですが、あなたはこれをちやんと台詞にし堂々と舞台を闊歩させて下さつた。(大岡 1951 : 114)

上の大岡の言葉から、今まで示してきた、福田による脚色の重点は、勉という登場人物にたいする脚色であったことが確認できる。福田は、小説『武蔵野夫人』の脚色において、原作と同じ「会話」や「事件」を用いながらも、勉を「主人公」として表現しようとしたのである。こうした試みからは、「外面的な事件や会話」の背後にひそむ「意図・性格・心理」を表現しようとする福田の創作態度が確認できる。福田は、小説『武蔵野夫人』の脚色について、「ぼくはできうるかぎり原作に忠実な脚色をこゝろみた」(福田 1951a : 156)とした上で、以下のように述べている。

少い会話にしる事件にしる、原作にあるものはほとんどこれを用ゐました。が、意図も性格も心理も、まつたくといつてよいほど原作とちがつたものにしたてあげたつもりです。すなはち、外面的な事件や会話が原作に忠実であるから、意図・性格・心理もおなじだとおもはれる危険性があるがゆゑに、原作を放棄してくれとお願いするわけでありませう。(福田 1951a : 156)

この引用で、福田は、自らの脚色について、「会話」や「事件」といった材料は、原作と同じであるとしている。その上で、脚色の「意図・性格・心理」は、「原作」のそれとは異なるものであることを強調している。「外面的な事件や会話」の背後にひそむという点で、「意図・性格・心理」は、内面的なものである。そのため、「意図・性格・心理」は表現しがたい。福田は、この点について、意識的であったことが、上の引用から確認できる。こうした福田の創作態度は、内面的な「意図・性格・心理」の不安定なありように注目している点で、福田が、D・H・ロレンスから読み取った「個人」の弱さに対する認識に重なるものといえよう。

VI おわりに

D・H・ロレンスの小説『チャタレイ夫人の恋人』を題材とし、戯曲という形をとった「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」では、福田のクリフォード観が示されている。そこには、「自意識の悪循環」という、福田が、D・H・ロレンスから読み取った問題点が示されていた。そして、その点が主題となる戯曲であった。以上のように、この戯曲は、D・H・ロレンスの原作に対する、福田による解釈、そして、その背後にある福田自身の思想を、福田自身の脚色を通して、示したものであった。

本論で言及した通り、チャタレイ裁判の間とその前後の時期に、福田が次々と発表する戯曲には、何らかの形で、ほかの作品が取り入れられている。先に示した通り、福田がほかの作品を取り入れる理由は、「貧弱な想像力が現実の輪郭を無視しがちなのを抑制するため」という福田の言葉に表れている(福田 1958 : 284)。つまり、福田は、彼自身の主題を表現する際に、「下敷」(＝ほかの作品からの借用)を必要としたのである。こうした点を踏まえれば、本稿において、検討した「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」における戯曲への脚色のありようから見出すことのできる福田の問題意識は、一連の戯曲における「下敷」の使用へとつながるものと思われる。この点について、それぞれの福田戯曲における「下敷」の具体的なありようは、機会を改めて提示したい。

引用文献¹⁰

- 磯田光一. 1967. 「福田恆存の卒業論文—演劇精神との関連にふれて—」、『日本現代文学全集 月報85』、10月、講談社、2-5ページ。
- 小澤純. 2008. 「比喩と道化—福田恆存『太宰と芥川』におけるロレンス『黙示録論』」、『太宰治スタディーズ』、2号、6月、116-133ページ。
- 大岡昇平. 1951. 「戯曲『武蔵野夫人』を読んで」、『演劇』、1巻1号、6月、114ページ。
- 川久保剛. 2008. 「昭和戦前・戦中期の福田恆存—原点としての「凡俗の倫理」—」、『麗澤学際ジャーナル』、16巻2号、9月、1-36ページ。
- 倉持三郎. 2007. 『『チャタレイ夫人の恋人』裁判—日米英の比較』、彩流社。
- 高柴慎治. 1987. 「伊藤整と福田恆存」、『昭和文学研究』、14号、2月、94-103ページ。
- 浜崎洋介. 2007. 「福田恆存の「政治と文学」—D・H・ロレンスからの影響—」、『日本比較文学会東京支部研究報告』、4号、9月、26 - 31ページ。

10 本稿では、『福田恆存全集』文芸春秋は、『全集 第〇巻』と、『福田恆存戯曲全集』文芸春秋は、『戯曲全集 第〇巻』と略記した。『全集』、『戯曲全集』所収文献は、『全集』、『戯曲全集』より引用した。但し、全集未収録の文献は、各初出雑誌より引用した。なお、引用に当たり、漢字表記を新字体に改めた。

- 福田恆存. 1936. 「リアリズムと批評の問題—文芸時評—」、『日本記録』、2号、10月、123-128ページ。
- . 1937. 「横光利一と『作家の秘密』—凡俗の倫理—」、『行動文学』、2巻1号、6-24ページ。
- . 1942. 「ロレンス『アポカリプス論』覚書」、『新文学』、1巻9号、10月、102-113ページ。
- . 1951a. 「解説」、『戯曲武蔵野夫人』、河出書房、156-157ページ。
- . 1951b. 『弁論要旨(チャタレイ事件第三十四回公判)』、11月30日。
- . 1952. 「結婚の永遠性—チャタレイ裁判最終弁論—」、『文学界』、4巻2号、2月、124-153ページ。
- . 1958. 「解説」、『福田恆存著作集 第2巻』、新潮社、283-290ページ。
- . 1987a. 「近代の克服」¹¹、『全集 第2巻』、30-41ページ。
- . 1987b. 「文学の効用」、『全集 第2巻』、251-265ページ。
- . 1987c. 「結婚の永遠性—チャタレイ裁判最終弁論—」¹²、『全集 第2巻』、46-115ページ。
- . 1987d. 「告白といふこと」、『全集 第2巻』、403-407ページ。
- . 1987e. 「自己劇化と告白」、『全集 第2巻』、409-420ページ。
- . 1987f. 「文芸批評家失格」、『全集 第4巻』、356-361ページ。
- . 2009a. 「最後の切札」、『戯曲全集 第1巻』、63-132ページ。
- . 2009b. 「キティ台風」、『戯曲全集 第1巻』、134-226ページ。
- . 2009c. 「幽霊やしき」、『戯曲全集 第2巻』、80-137ページ。
- . 2009d. 「龍を撫でた男」、『戯曲全集 第2巻』、8-78ページ。
- . 2009e. 「放送劇 チャタレイ夫人の恋人」、『戯曲全集 第2巻』、298-318ページ。
- . 2009f. 「現代の英雄」、『戯曲全集 第2巻』、140-236ページ。
- . 2010. 「戯曲 武蔵野夫人」、『戯曲全集 第3巻』、196-276ページ。
- みなもごろう. 1977年. 「資料紹介 雲の会編集『演劇』」、『大妻国文』、8号、3月、149-166ページ。
- ロレンス、デーヴィット H. 1950. 『チャタレイ夫人の恋人 上・下巻』伊藤整訳、小山書店。
- ロレンス、デーヴィット H. 2004. 『黙示録論—現代人は愛しうるか—』福田恆存訳、筑摩書房。

11 『全集』では、「ロレンス I」と改題されている。

12 『全集』では、「ロレンス III」と改題されている。

Lawrence, David H. 1995. *Apocalypse and the writings on revalation*. London. Penguin Books.

———. 2006. *Lady Chatterley's Lover*. London. Penguin Books.